

建物被災と放射能汚染の中で再建をめざす

(学校法人アジア学院アジア農村指導者養成専門学校校長 大津健一)

3月11日の東日本大震災は、アジア学院に大きな建物被害をもたらしました。コイノニアハウスや本館について、松下充孝氏（松下設計代表、大宮教会役員）は、全壊相当と診断され、安全上できるだけ早く建替えが必要だと指摘されました。また、3月12日、福島第一原発1号機で起こった水素爆発は、広範囲にわたって放射能を撒き散らしました。震災後も余震が続き、放射能による土壌汚染があるアジア学院でアジア、アフリカなどから学生を招くことが適切かという問題に直面しました。その結果、東京町田市にある農村伝道神学校の施設の一部をお借りして1ヶ月遅れで新学期を5月2日開始し、3ヶ月間研修を行った後、7月28日にアジア学院に戻ってきました。現在全員元気で研修を続けています。

地震による建物被害については、松下氏と相談しながら復興計画を立て、第1次復興計画として2011年度研修ができるように被災建物の応急補修工事をしました。現在この第1次復旧計画がほぼ完了し、第2次復興計画へと進んでいます。ここでは、全壊に相当すると診断された本館及びチャペルや食堂がある現コイノニア棟を解体し、それに代わって教室棟（教室・会議室）と食堂棟を新築、チャペルは別棟として建築する予定にしています。いずれの建物も、環境に配慮したシンプルな建物にしたいと願っています。また本館にある事務所や職員室、補助活動部の機能は、新農業研修棟へ移動し、新農業研修棟は本部の機能を兼ね備えることとなります。第2次復興計画の完了は、2012年3月末を目ざしています。



8月13日の理事会で承認された全体の復興計画の予算総額は5億3千万円です。これに対する資金計画は、寄付金・援助金が3億3千万円、文部科学省からの災害復旧補助金が2億円です。寄付金・援助金3億3千万円のうち、これまでに寄せられた寄付金・援助金が1億円で、残りの2億3千万円については更なる復興募金を1億3千万円(9月初旬「復興募金趣意書」を送付し、皆様の協力を得たいと願っています)と日本基督教団から1億円の援助金(教

団よりの1億円は、関東教区を通して支援のお願いをしています)を充てる計画です。

アジア学院は、建物被災と放射能による土壌汚染という2つの大きな問題に直面していますが、この問題を解決してアジア学院の再建に取り組み、この地にあってアジア、アフリカの貧しい農村で働く草の根農村指導者養成という使命を担い続けて行きたいと思えます。また、西那須野の地にあることを大切に、地域や教会の人々とともに手を携えて、共に希望が見える地域づくりに参加していきたいと願っています。

引き続き関東教区諸教会の皆さまのご支援とお祈りをお願い申し上げます。



敬和学園高校の取り組み

第3回 被災者支援労作（6月16日～19日）

敬和学園は今年度、東日本大震災被災者のことを常に意識しながらすべてのことに取り組みたいとの願いを持っています。そこで具体的な活動の一つとして、被災地支援労作を5月から始めました。

聖書ルカによる福音書10章25節以下に「善いサマリア人」のたとえ話が書かれています。最後の部分に律法の専門家とイエス・キリストのやりとりが次のように記されています。「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」。律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこでイエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい」。この言葉に忠実であるところに敬和学園の人間教育はあると考えています。



大雪クラス K.C.

今回の被災者支援労作を通して感じたこと、それは人と人とのつながりの大切さです。

私は人とかかわりを持つのが好きではなく、むしろニガテでした。だからこういう泊りがけの労作は本当にいやでした。被災者支援労作には前々から参加してみたかったので、泊りがけということはガマンして参加しました。実際男子の中には同学年の人でも一言二言しか話したことの無い人ばかりで少し不安でした。

被災地に着き、周りをみると、テレビでよく見ていた光景が広がっていました。テレビで見ていた時ですら言葉を失ってしまったのに、自分の目で見た時のショックは想像以上でした。側溝の泥のかき出しをしている時も、土台しか残っていない家や、ぐしゃぐしゃになった車が数えきれないほどあり、バスの中でおもわず泣きそうになりました。

作業中、他のボランティアの団体の方たちと協力して汚泥をかき出していると、話したこともなかった男子と自然と話せていたり、初めて会ったボランティアの人と話せていることに気が付きました。どうやって話したらいいだろう、なんて考える事もなく、普通に話せていたのは、人見知りの私にとって、とても驚きでした。一度話せてしまえば、あとは何も気にすることはなく、一日目も二日目もみんなと協力して作業することが出来ました。

作業はなかなかキツくて汗だくになりながらやっていたのに、なぜか手を休めることが出来ませんでした。自分が出来ることはこのくらいしかないから、もっとがんばって働かないといけないと思い、ひたすら泥を運びました。でも作業が終わってから、ボランティアセンターの人たちに、「ありがとう」と言われただけで、体が軽くなった気がしました。

今回の大地震はとても悲しいことだったと思います。でもこの地震がなかったら、こんなに人とつながることもなかったと思うと、少しだけ良かったと思ってしまいました。不謹慎だとは思いますが、この被災者支援労作があって良かったと思いました。次の機会にもできれば参加したいと思いました。

敬和学園高校ホームページより <http://www.keiwa-h.jp/topics/?cat=43>